

教壇実習報告 グループ2（日本語教育）
ヴァッサー大学教壇実習報告（日本語教育）
人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
吉田好美 王亜茹 鄭在喜

教壇実習報告**1. 授業の背景**

言葉を学ぶということは、文法や発音をマスターするだけではなく、その外国語が話されている社会的、文化的背景を理解することでもある。このことは、学ぶ場所が学校であっても同じである。日本語の授業に文化を取り入れることで、言葉が生きたものとなり、日本人と実際にコミュニケーションを行う際にも役に立つと思われる。

今回の教壇実習では、このような背景を踏まえ、「言語と文化をともに学ぶ日本語の授業」をテーマにし、すなわち言語行動の裏に潜んでいる文化を取り入れ、言葉とともに学生に教示することを試みた。

2. 先行研究

森山（2010）では、言語と文化は本来一体のものであるとしている。そして、子供の母語習得に際しても母語と母文化とは一体のものとして学ばれることを、第二言語教育では分けて教育を行っているわけであり、多言語・多文化が共存するグローバルな時代であって、それを分けて教えないければならない必然性はもはや少なくなっていると述べられている。

尚、子供が初めから母語と母文化を同時に学ぶように、日本語で日本文化を教える際にもそれぞれのレベルで教授可能な日本文化があるはずであると、それをうまく取捨選択し、レベルに応じて配列して教えればよいと述べられている。その例として初級では挨拶に伴う非言語行動などを教え、中級ではアニメやサブカルチャーを導入することを提案している。

しかし、森山では提案に留まっており、実践までは至っていない。そこで、今回の実習では初級の学習者を対象にし、言語行動を取り入れた授業を試みた。

3. 教育実習の概要

授業は2009年11月の15日、18日、20日に米国のヴァッサー大学において行った。授業は午前1コマ、午後1コマ実施され、授業時間は1コマにつき50分であった。学習者はヴァッサー大学の3年生で、人数は午前のクラスは12名、午後のクラスは10名であり、日本語のレベルは日本語能力試験の3級レベル程度であった。

実習生は3名で、「断り」「依頼」「御礼」という3つの学習項目をそれぞれが取り上げ、それぞれ単

独に一日の授業（2コマ）を担当する形であった。また、渡米する前に、シラバス（参考資料1）を作成し、事前課題をメールで配布した。

4. 授業の目標及び学習項目**4.1 「断り」の授業について****4.1.1 授業の目標**

日本語教育現場における、断り方の指導法としては、「日本人は直接的な表現を使用せずに、あいまいに断る」ということを提示し、特に初級レベルでは「できない・だめです」などの直接的表現を使用せずに、「すみません、～はちょっと」といった、謝罪とあいまいな表現を使用して、断る練習をさせるという指導法が一般的である。

しかし実際に日本人が断る際には、必ず謝罪や「～はちょっと」という表現が使用されているかといえば決してそうではなく、もっと様々な表現や方略が使用されていると思われる。そのため外国人にとっては、日本人が断っているのかが判断しにくく、それがミスコミュニケーションの原因になっていることもある。

そしてそのミスコミュニケーションの原因のひとつには、断りにおける弁明の使用に特徴があるからだと考えられる。吉田（2009）では、日本人女子学生とインドネシア人女子学生の勧誘場面での断りに見られる弁明について調査したところ、日本人は、断り手が直接的な表現や謝罪を使用せずに、弁明のみを使用して断りを表し、勧誘者に断りの意図を察してもらうという傾向があるとしている。

筆者は中国滞在経験があるのだが、中国人の友人に勧誘を受けたとき、どうしても断らなくてはいけない状況にあったため、日本のように弁明のみを述べて、断りの意図を察してもらおうとしたことがある。しかし、いつまでたっても相手にわかってもらえず、延々と勧誘を受け続け困った経験がある。

このように弁明のみを述べて、相手に断りを察してもらうスタイルは、異文化環境においてはそれが断りだと認識されず、断りの意図が理解されにくいという問題が起こってくると考えられる。

そこで本授業においては、弁明が断りのコミュニケーションの中で重要な役割を担っているということを理解し、日本人の断りにおけるあいまい性を、弁明使用という別の側面から気づくという目標を設定した。

4.1.2 学習項目

日本語の教科書で習う、謝罪と「～はちょっと」という形式を使用した断り方の会話例と、弁明のみで断りを伝達しようとしている会話例とを比較し、弁明が断りの中で大きな役割を果たしていることに気づいたうえで、直接的な表現や、謝罪などを使わずに、弁明のみで断るという方略を身につける。

4.2 「依頼」の授業について

4.2.1 授業の目標

「依頼」とは、自分のために相手に時間や労力をかけさせる行為であり、相手の邪魔されたくないというネガティブ・フェイスを脅かす行為でもある（Brown & Levinson: 1987）。従って、相手のフェイスを保持するのにポライトネスを考慮した言語行動が要求される。しかし、日本語の場合、依頼者と依頼される相手の上下関係によって、そのポライトネスの度合いは必ず同等とは言えない。王（2005）は日中両言語における依頼の表現の対照研究を行ったところ、場面・依頼内容・相手が同一であるにも関わらず、日中両言語の依頼表現の丁寧さが異なることを明らかにした。それは、日本語には敬語体系を構成しているのに対し、中国語には日本語の敬語体系のように対人関係を直接表現する語彙は極めて少ないからであると指摘している。すなわち、日本語は独自の表現形式の体系を持ち、対人関係の調整手段を発達させているのであると言えよう。この点から考えると、対人関係による依頼の表現を学習者に教示する必要がある。今回の授業の内容は、対人関係を「先生」と「友達」に設定し、作文のチェックを依頼するという具体的かつ有用な場面における依頼表現を教示し、その違いを学習者に気付いてもらうことを授業のデザインとした。

4.2.2 学習項目

作文のチェックを友達と先生に頼む場合の表現とその違いについて学び、友達への依頼に比べ、先生への依頼は、文も談話展開も長くなることに気付いてもらう。

4.3 「御礼」の授業について

4.3.1 授業の目標

感謝の気持ちを表すため、御礼を言うことはコミュニケーションで、一番大切なことの一つである。外国で、その国の人に何かしてもらったら、その国の言葉で「ありがとう」と言えばいいだろうと思う人が多いかもしれないが、実際は文化によっていろいろな違いがあると思われる。そこで、本授業では学習者と同様の立場である留学生の御礼に関する経験談を用い、それぞれの文化によって御礼のしかたが異なることを気づかせることを目標とした。

そして、日本での御礼のしかたの中、是非覚えてほしいものを二つ選び、授業をデザインした。まず、一番目として「再会したとき、もう一回御

礼を言う日本の習慣を学ぶ」、二番目としては「すみません」という表現が感謝の気持ちを表す場面でも使えることを理解してもらう」というものである。また、御礼を言うときの表情や身ぶりの大切さ、お辞儀についても触れ、文化によって大きく異なることを強調する。

4.3.2 学習項目

一番目の再会した際にも御礼を言う日本の習慣に関しては、シリアからの留学生の経験談を読みながら、日本の御礼のしかたについて考えてみることである。二番目の「すみません」で感謝の気持ちを表すことに関しては、具体的な場面提示を通し、「すみません」で感謝の気持ちを表せる場面を理解してもらうことである。

5. 授業の内容

5.1 「断り」の授業内容

まずイントロダクションとして、シラバス（参考資料1）に記した、3つの表現の中で断りを表しているものはどれかを考え、それを選んだ理由を述べさせた。そのあと、事前課題として配布したモデル会話（参考資料2）を2つ見せた。1つは断り手が、勧誘者の映画の誘いに対して、謝罪と「～はちょっと」という表現で明示的に断りを表している会話例で、もう1つは弁明のみで断りの意志を表そうとしている会話例であった。この2つの会話例を筆者と鄭さん、筆者と王さんのペアで音読し聞かせた。次に会話例1と2の違いについて、ペアになって考えさせた。違いとして挙げられたのは、1は会話が短く、謝罪や「～はちょっと」が出ているため、はっきり明示的に断っていてわかりやすい、といった意見が出たのに対して、2は、弁明をたくさんして会話が長い、勧誘者が何回も質問している、勧誘者は日本人ではなく異文化の人ではないかという推測も出た。以上のような違いを述べたあと、筆者から日本人の断りのコミュニケーションでは、弁明のみで断りを表す方略もあるということを提示した。そのあと、ペアを組ませて、勧誘者と断り手に分かれてロールプレイを行い、発表させた。ただし断り手は、弁明のみで断り、「できない、だめだ」などの直接的表現や、「すみません」などの謝罪表現を使わないようにする条件を出した。発表内容はそれぞれ個性に富んでおり、大いに盛り上がった。最後に、4.1.1項で述べた筆者の中国での体験談を述べて、日中でのコミュニケーションのスタイルの違いに気がついたことを話した。また王さんと鄭さんには、日本人との断りのコミュニケーションについて、気付いたことや苦労したことなどについて、体験談を述べていただいた。最後に日本の断り方についての感想を聞いたところ、アメリカでの断りのコミュニケーションはもっとストレートであり、日本の断り方はいろんな意味であいまいであるという意見が出た。

5.2 「依頼」の授業内容

授業は、事前課題（参考資料 2）のチェックから始まり、学習者に作成してもらった会話を発表してもらい、そこに出た問題点を教師から説明しながら授業を進行させた。

具体的には、友達・先生に何かを依頼するとき、どのような表現が考えられるのかについてロールプレイの形で発表してもらった。そこで学習者により作られた会話文における依頼表現の問題点を引き出すことができた。そして、事前に用意した 2 つのモデル会話（参考資料 3）を配布した。会話は友達と先生に作文のチェックをお願いするという内容であった。モデル会話について勉強したあとで、2 つの会話を比べ、両者の違いについてディスカッションをしたのち、発表してもらった。そこで、先生に依頼する場合は、友達に依頼する場合より、ポライトネスの度合いが強く、分量も多くなっていくことに気付いてもらった。また、日本語と英語、すなわち学習の学習目的言語と母語における依頼表現の違いについても話してもらい、英語の依頼表現は日本語ほど複雑ではなく、先生と友人の場合においても、日本語ほど区別されていないことも気付いてもらった。最後に、事前課題に戻り、モデル会話から学んだ正しい依頼表現で問題点を書き直してもらった。

5.3 「御礼」の授業内容

まず、導入として日本語で御礼を言う際、どのように言うのかを聞き、板書した。学習者からは「ありがとうございました」、「お世話になりました」、「どうも」、「すみません」などの答えが出た。そこで、『日本語基礎 B（'07）—コミュニケーションと異文化理解—』（2007）放送大学教材から抜粋したシリアからきた留学生の、日本の御礼に関して感じた経験談を用い、その内容に関する質問の答えをグループで話し合ってもらった。授業は話し合いを中心に行うつもりであったため、経験談の内容は事前課題として出しておいた。提示した質問の答え合わせをしながら、経験談の内容把握も確認できた。話し合った内容を発表しながら、日本では再会した際、どのように御礼を言うのかを、導入段階で板書したものに「先日は」、「この間は」、「昨日は」などを付け加えた。そして、このように何度も御礼を言う習慣について各々の意見を聞いた。学習者からは「より丁寧な感じがしていいと思う」、「何度も御礼を言うことはやはり相手との距離感が感じられる」などの意見が出た。

まとめとして、何回も御礼を言うことは日本の大切な習慣であることを説明し、今後日本人にお世話になることがあったら、再会した際にも御礼を言うことを勧めた。それから、「すみません」で感謝の気持ちを表すことに関しては、「自分のために、相手が時間や労力を使ったことを謝って、感謝の気持ちを表せる」と説明した後、いくつかの場面を提示し、「すみません」で感謝を表せる場面

を選んでもらった。みんなわりとすぐ理解し、上手に場面を選んでいった。日本語の「すみません」が「I'm sorry」、「Excuse me」の意味以外、「ありがとう」の意味でも使えるということを知らなかった学習者もいて、具体的な場面提示が勉強になったようであった。最後に総まとめとして、授業内容を整理し、質問などを受け、終わりにした。

6. 授業の評価

3 日間の授業を終えた直後、学習者にアンケート調査用紙（参考資料 4）を配り、授業に対する感想・評価を日本語若しくは英語で自由に記入してもらった。なお、午前のクラスは 11 名、午後のクラスは 8 名の学習者からの感想をもらった。

6.1 「断り」についての評価

「断り」の授業については、「面白かった」「分りやすかった」「教科書にないことを学べた」「勉強になった」という授業そのものに対する評価と、『「～はちょっと」や「できない」という直接的表現を使用せずに断るのが大変だった』という断り方の難しさについて述べた感想があった。また「日本人を誘うときにしつこくなりすぎないように気をつけたい」と、断り手だけでなく、誘い手に着目した気づきもあった。

6.2 「依頼」についての評価

「依頼」の授業については、主に以下のようなことが評価されている。「面白かった」「分りやすかった」「依頼表現は非常に大事で使ってみた」などである。中に「これは既習項目であり、理解するにはそれほど難しくなかったが、面白かった」という感想もあった。

学習者の感想により、今回の教育実習が楽しい交流であったことと示されたが、「依頼」表現について既習項目であるという報告があったことから、今回の授業は新たな勉強になったとは限らないと感じている。事前調査が不十分であったことについて強く責任を感じ、反省点として今後の教育実践の参考となった。

6.3 「御礼」についての評価

全体的に「留学生の経験談を読んでそれについて話し合ったことが楽しかった」、「使えるような表現が多かったため、勉強になった」、「英語と日本語の御礼の違いが分かった」、「「すみません」で御礼が言える場面を例として挙げてくれたことが勉強になった」という回答が多かった。しかし、「経験談の内容が難しかった」という意見もあった。

これに関しては、授業前に経験談を読んでくることを課題として出していたが、実際の授業でも学生同士の話し合いに入る前に、経験談を音読させるなど、正確に内容を把握しているのかを確認すべきだったと反省している。

6.4 総合評価

まず文化を取り入れた日本語の授業に対する評価については、「面白かった」「もう一度やってほ

しい」「教科書で得る知識よりも有益であった」という肯定的評価が得られた。「文化と言語は切り離せないで、言語と文化といっしょに勉強することが大事だ」という、言語教育に文化を取り入れることの重要性に対する意見も見られた。また「日本文化はあいまいで、特に断りと依頼はダイレクトじゃない」という感想もあった。

その他の感想としては、「断り・依頼・御礼の3つのテーマはとても重要で、この3点にフォーカスを当てたことがよかった。」とする一方で「3日間の授業内容の難易度に差があり、分りやすかったものとそうでなかったものがあった」「授業で求められていることが予測できず、神経質になり、自分自身日本語で表現できないときは恥ずかしい思いをした」という意見もあり、学習者に負担をかけていた側面も見受けられた。

7. 実習生の感想

7.1 吉田による感想

筆者は日本語教育の経験がかれこれ10年ほどあるが、今回のように文化を取り入れた日本語授業をデザインするというのは初めてだった。はじめはどのように授業計画を立てたらいいのか分からなかったが、今回は文型など言語形式に着目するというよりは、コミュニケーションの流れの違いに対する「気づき」を得るところを大きな目標にしてからは、学生にはその気づきがたとえどんなものであっても、日本に対するマイナスイメージになってもいいから、文化の違いに注目し、気づくことの重要性を感じてもらえたらいいと思って、実習に臨んだ。

実は2009年度前期に、筆者はお茶の水女子大学で実施された、ヴァッサー大学のサマープログラムで日本語の授業を担当していた。今回の実習クラスでは、そのサマープログラム参加者が在籍していたため、学生の様子やレベルなどが事前にある程度把握できていたことで、授業が進めやすかったと思う。また個人的にはサマープログラムで出会った学生にもう一度会えたことが、非常にうれしかった。

自分にとって最大の課題は、50分という限られた時間の中で、「断り」について、どこまで伝え、どこまで気付いてもらい、どこまで深められるかを考えながら、授業で取り扱える範囲を見極めることであった。授業内容が簡単すぎてもつまらないし、難しすぎても消化不良で伝わらないため、どこまで授業で扱うかを考えるのが難しいと感じた。50分という授業時間内でどれだけ自分の伝えたいことが伝えられるかは、ある意味勝負に近いところがあった。結果的に自分が伝えなかった「弁明が断りの中で大きな役割を果たす」というところは伝わったような気がするが、あくまで気がするだけで、50分という授業時間で自分が扱った授業内容が、適切だったのかどうかは疑問が残る。

また今回は1人50分授業を2回、1話完結のオムニバス方式のような授業だったが、果たしてこの時間及び回数の配分が、今回の「言語と文化をともに学ぶ日本語の授業」というテーマの教育実習として妥当だったのかどうかは、自分自身もよく分からない。もし今後、文化を取り入れた日本語の授業を継続的に進めていくのであれば、実習の時間や期間についても更に検討していく必要があると思われる。

最後に、今回の実習でご指導くださった森山先生をはじめ、王亜茹さんと鄭在喜さんに、心から感謝の意を申し上げたい。特に王さんと鄭さんからは、チームティーチングで授業を組み立てていくプロセスにおいて、多くを学ぶことができた。お二人からは日本語非母語話者の観点から、日本の言語文化についていろいろと思うところを聞かせていただいたり、アドバイスをいただいたりして、授業内容に反映させることができた。お二人とのコミュニケーションで得られたことは、今回の授業に限らず、今後日本語教育を続けて行くにあたって、筆者にとって非常に大きな糧となったと言えよう。

7.2 王による感想

今回の教壇実習は私にとって初めての日本語教師としての体験であり、大変いい勉強となった。

まず、教案作成の段階をはじめ、授業の流れ、そしてどのように進めればいいのかを大まかに心得ていた。特に授業の事前準備の段階はいかに大事であるかということも実感した。以前は、日本語ができたら、ある程度準備すれば、誰でも教師になれると考えていたが、三日間の実習をふり返ると、この考え方の甘さを反省した。教師という立場に立ってはじめて教師の仕事が分かるようになってきた。それは、心労と肉体労働の二重努力が必要で、より良い授業ができるようになるためには、何度も教案や教材などを作り直していく必要がある、どのようにすれば学習者にしっかり学んでもらうことができるかを常に考え、改良するという教師の努力が非常に大切であることを改めて認識できた。また授業中での臨機応変な能力も教師側に要求されることを実感した。欧米の日本語学習者はアジアの日本語学習者と違い、自己表現欲が強く、コミュニケーション能力が思ったよりかなり高かった。そして、文法や発音の習得より、文化についてかなり強い興味を持っていた。従って、今回の文化を取り入れた授業の試案は非常に適切であったと考えられる。

勿論、授業の後で、反省すべきことも少なくなかった。まず事前準備が不足していた点である。学習者の情報などについてもっと調べたほうが良かったと反省している。また授業の内容を更に充実する必要がある、授業の時間の分配についても更に工夫すべきであったと反省している。例えば、事前課題に出てきた問題点を書き直してもらった

が、授業中にひとつひとつ指導できず、結局解答用紙を回収し、次の実習の日に渡すことになってしまったことがあった。そこで自分の未熟さをおおいに感じ、今後足りないところを磨いていこうと決心した。

今回の実習は、日本語の教師になるという夢に一步踏み出す大変貴重な機会となった。授業の準備の段階から森山先生やほかの 2 名の実習生の吉田好美さんと鄭在喜さんに多くのアドバイスをいただき、この場を借り、感謝の意を申し上げたいと思う。

7.3 鄭による感想

今回の実習はアメリカのヴァッサー大学の 3 年生を対象に、「言語と文化をともに学ぶ日本語の授業」であった。3 人の実習生が特徴のある日本語の言語行動についてそれぞれ考えた結果、「断り」、「依頼」、「御礼」というテーマが決まり、私はその中で「御礼」を担当することになった。私自身、日本語を教えた経験はあるものの、今回の実習のような、文型中心ではなく文化を取り入れた授業は初めてだったので、最初は少し戸惑いを感じていた。しかし、打ち合わせを通し、授業案を整えていくにつれ、文化を取り入れた初体験の授業に少しずつ興味を持つようになり、実習が段々楽しみになっていったことを今でも覚えている。

普段日本語を教える際にもよく感じることだが、今回の実習もとても良い学習者に会え、彼らにいろいろと助けられたため、大きなトラブルもなく無事に終えることができたと思う。彼らはいろいろと未熟な私たち実習生をやさしく迎えてくれて授業中にもとても明るく、積極的に参加してくれた。そして、実習後行ったアンケートで、このように文化と一緒に日本語を勉強する授業についてどう思ったかという質問があったが、全体的に「とても勉強になった」、「文化と一緒に言語を勉

強することは大事だと思う」という意見が多かったため、今回の実習にとってもやりがいを感じた。

今回の実習は、私自身も日本の文化や言語行動について再度考えるきっかけとなった。また、それについていろんな国の学生たちと話し合ったことによってやはり言語と文化は切り離しては考えられないものであることが再確認できた。実際の日本語教育現場で文化までを取り入れた授業はそう簡単にできるものではないと思われるが、学習者の誤用や不自然な表現の中には目標言語の文化や習慣をきちんと理解していないため起こる場合が多いことを考えると、今後文化とともに勉強する授業を真剣に工夫していかなければならないと思う。

最後に、今回の実習への参加を許可して下さった指導教員の森山先生をはじめ、一緒に実習を行い、授業に関していろいろとアドバイスをしてくださった吉田好美さんと王亜茹さんに、この場をお借りして感謝の意を申し上げたい。

参考文献

- 森山新 (2010) 「Holistic Education Of Japanese Language in the Global Era」『比較日本学教育研究センター研究年報』第 6 号、比較日本学教育研究センター (近日刊)
- 王志英 (2005) 『命令・依頼の表現—日本語・中国語の対照研究—』勉誠出版
- Brown, P. and S. C. Levinson (1987) 『Politeness: some universals in language usage.』Cambridge, etc. Cambridge UP.
- 吉田好美 (2009) 「勧誘場面の断りに見られる「弁明」について—日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較—」『第 38 回日本言語文化学会 研究発表要旨』
- 姫野昌子・伊東祐郎 (2007) 『日本語基礎 B ('07) —コミュニケーションと異文化理解—』放送大学教材

よしだ よしみ、おう あじよ、ちょん じえひ
／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

参考資料1 実習シラバス

げんご ぶんか まな にほんご じゅぎょう
言語と文化とともに学ぶ日本語の授業

ヴァッサー大 学 の日本語クラスの皆さん、はじめまして！

わたしたちは、お茶の水女子大 学 の大 学 院 生 です。どうぞよろしくお 願 い します。

わたしたちの 授 業 のテーマは、『言語と文化とともに学ぶ日本語の 授 業 』です。

外国語を 勉 強 するときは、言葉だけでなく文化も 勉 強 したほうが 楽 しい と思 います。

文化と一 言 で 言 っても、いろいろあります。たとえば、茶道・華道のような 伝 統 文化はもちろん、 歴 史
や 文 学 などもあります。しかしわたしたちがよく 話 す文化というのは、たとえば、「日本人はあいまい
だ。」「日本人はノーと言わない。」「アメリカ人はストレートだ。」「〇〇人は△△だ。」などといった言語
行 動 speech act ではないでしょうか？

そこで、今 回 は、言語行 動 の中でも、断 り refusal・依 頼 request・御 礼 appreciation の3 つについ
て 考 えたい と思 います。

日本 の言語行 動 について、みんなでいっしょに 考 え て、いっしょに 楽 し み まし ょ う。

皆 さん と 授 業 で 会 えるのを、心 より 楽 し み に して お り ま す。

よしだ よしみ オウ アジョ チョン ジェヒ
吉田 好美 王 亜茹 鄭 在喜



日にち	11月16日（月）	11月18日（水）	11月20日（金）
テーマ	ことわ 断 り	いらい 依 頼	おれい 御 礼
10:00 ～ 11:00	にほんじん えいが さそ 日本人を映画に誘いました。 にほんじん こた 日本人の答えは、つぎの3 ことわ つでした。断 っているのは どれでしょうか？	ともだち なに ねが 1. 友達に何かをお願いする とき、どのように言ったらいい でしょうか。 せんせい なに ねが 2. 先生 に何 かをお願いす るとき、どのように言ったら いいでしょうか。 べんきょう いっしょに 勉 強 しまし ょ う！	みなさんは、 にほんじん さいかい 1. 日本人は再 会 したとき いっかい おれい い もう一 回 御 礼 を 言 う こと を どう 思 いますか。 2. 「すみません」が「ありがと う」の意味で使えることを し 知 っていますか。 授 業 でいっしょに 考 え まし ょ う！
14:00 ～ 15:00	① ごめんなさい。ちよっと。 あしたようじ ② 明日用事があるんだよね。 ③ ええ？ああ↓明日かあ↓ つづ 続きは16日に<(^▽^)>		
担当	ヨシダ ヨシミ 吉田 好美	オウ アジョ 王 亜茹	チョン ジェヒ 鄭 在喜
事前 課題	あり（授業の前に読んできて ください。）	あり （16日に出してください）	あり（授業の前に読んできてく ださい。）

参考資料 2「断り」授業資料

じぜんかだい ことわ
＜事前課題＞ 断り

がつ にち げつようび
11月16日（月曜日）

じゅぎょう まえ つぎ かいわ よ もんだい こた ことば
授業の前に、次のⅠからⅡの会話を読んで、問題に答えてください。わからない言葉は

しら
調べておいてください。

- Ⅰ A: Bさん、土曜日映画に行かない？
B: ああ、土曜日か・・・土曜日はちょっと。
A: そうか。残念だね。
B: ごめんね。また、今度ね。
A: ううん。こっちこそ、ごめん。
B: じゃあね。
A: またね。

問題 Bさんは、映画に

- ① 行けます ② 行けません ③ 分かりません

- Ⅱ A: Bさん、土曜日映画に行かない？
B: ああ、土曜日か・・・土曜日は都合が悪くて・・・
A: 何かあるの？
B: うん。土屋先生の宿題があつて、月曜日に出さなきゃいけないんだ。
A: そうか。忙しいんだね。じゃあ、次の週末は？
B: 次か・・・次も用事があつて・・・
A: どんな用事？
B: 日本から、友達遊びにくるかもしれないから、いろいろ案内しなきゃいけないの。
A: じゃあ、いつがいい？



- B: ああ・・・今、まだちょっと分からないの。友達から連絡ないし。
A: そうなんだ。じゃあ予定が分かったら、教えて。
B: うん、わかった。

問題 Bさんは、映画に

- ① 行きたい ② 行きたくない
③ 分からない



- B: ああ・・・今、まだちょっと分からないの。友達から連絡ないし。
友達が来る予定がわかったら、また電話するよ。
A: うん、わかった。

問題 Bさんは、映画に

- ① 行きたい ② 行きたくない
③ 分からない

参考資料3「依頼」授業資料

モデル会話①＜友だちとの会話＞

【留学生のメアリさん(M)と日本人友だちの田中陽子(T)さんの会話です。】

M：陽子ちゃん、お願いがあるんだけど。

T：何？

M：えっと、来週提出しなきゃならない作文があるんだけど、それをチェックしてくれない？

T：うん、いいよ。いつ返せばいい？

M：できれば、今週中に返してほしいんだけど。

T：分かった。

M：ありがとう。助かった。

モデル会話②＜先生との会話＞

【留学生のメアリさん(M)と土屋先生(T)の会話です。】

M：先生、すみません。ちょっとお願いがあるんですが。

T：はい、何ですか。

M：えっと（あのう）、来週までに提出しなければならない作文があるんですが、ちょっと見ていただけませんか。

T：はい、いいですよ。どれですか。

M：これなんですけど。

T：分かりました。いつまでに返せばいいですか。

M：できれば、今週中にお願いしたいんですが。

T：はい。分かりました。じゃ、チェックが終わったら、連絡しますので、私の研究室に取りに来て下さい。

M：はい、どうもありがとうございます。

参考資料 4「依頼」事前課題

なまえ
名前：_____&_____&_____

みなさん、

以下の2つの場面で、友だちと2人か3人でペアになって会話を作ってみてください。そして11月16日（月曜日）の授業のあとに出してください。

- 1) 来週提出しなければならない日本語の作文があります。日本人の友だちにそれをチェックしてもらいたいと思っていますが、何と言って頼みますか。

会話：

【あなた(Y)と日本人の友だち(J)の会話】

Y：Jちゃん、お願いがあるんだけど。

J：_____

Y：_____

J：_____

Y：_____

……

- 2) 来週提出しなければならない日本語の作文があります。日本人の先生にそれを見てもらいたいと思っていますが、何と言って頼みますか。

会話：【あなた(Y)と日本人の先生(T)の会話】

Y：先生、すみません、ちょっとお願いがあるんですが。

T：_____

Y：_____

T：_____

Y：_____

……

どうもありがとうございました。

参考資料5「御礼」授業資料

- ◆ 次のエピソードは、日本^{にほん}で留学^{りゅうがく}をしているある留学生^{りゅうがくせい}が日本^{にほん}で体験^{たいけん}したものです。
これを^よ読んでみんなで話し合^{はな}って^あみましょう。

<エピソード>

シリア^きから来た^{りゅうがくせい}留学生^{けいけんだん}（A）の経験談

日本人^{にほんじん}：Aさん、日本^{にほん}で御礼^{おれい}を言うときに、困^{こま}ったことがありますか。

A：はい、最初^{さいしょ}は御礼^{おれい}の言い方^いがよくわからなくて、困^{こま}りました。いつお辞儀^{じぎ}をすればいいのかも、わからなかったので、いつも『どうも』とだけ言^いっていました。それから、日本^{にほん}では、何か^{なに}してもらったら、そのとき^{ひと}だけではなく、あとでその人^あに会^いったときに、もう一度^{いちど}御礼^{おれい}を言うことがよくありますね。シリアでは、何回^{なんかい}も御礼^いを言^すい過ぎると、逆^{ぎやく}にバカにしているようにとられて、失礼^{しつれい}になってしまいます。例えばだれかにごちそうしてもらったら、次^{つぎ}の機会^{きかい}に自分^{じぶん}も同じようにしなければなりません、ごちそうしてもらったあとで、その人^{ひと}に会^あったときに、また御礼^{おれい}を言^いうことはありません。だから、日本^{にほん}に来^きたばかりのころは、日本人^{にほんじん}のそういう挨拶^{あいさつ}は、何だかしつこくて、慣^{なん}れることができませんでした。

<新しい語彙>

- | | |
|--------------------------|-------------------------------------|
| ・経験談 ^{けいけんだん} ： | ・言 ^い い過ぎる ^す ： |
| ・困 ^{こま} る： | ・自分 ^{じぶん} ： |
| ・お辞儀 ^{じぎ} ： | ・しつこい： |
| ・逆 ^{ぎやく} に： | ・同じ ^{おな} じ： |

1. Aさんが最初^{さいしょ}日本^{にほん}に来^きた時^{とき}、困^{こま}ったことは何^{なん}でしたか。

2. Aさんは、なぜいつも『どうも』だけ言^いっていましたか。

3. Aさんは、なぜ日本^{にほん}のもう一度^{いちど}御礼^いを言^{へん}うことが変^{おも}だと思いましたか。
また、みなさんはどう思^{おも}いますか。

4. アメリカではどんなとき、どのように御礼を言いますか。
また、それは日本とどう違いますか。

- ◆ はな あ はっぴょう 話し合ったことを発表してみましょう！！
◆ 「すみません」が「ありがとう」の意味で使えることを知っていますか。
つぎ ばめん 次の場面で、「すみません」が「ありがとう」の意味で使える場面はどれだと思いますか。正しい
おも ばめん と思う場面に「○」をつけてください。

ば めん 場 面	ありがとう (ございます)	すみません (ごめんね)
① お店で店員がお水をお代わりしてくれた。		
② 旅行に行ってきた友だちがお土産を買ってきてくれた。		
③ 今朝、友だちに「今日の服、かわいいね」とほめられた。		
④ 引越しの時に友だちが来て手伝ってくれた。		
⑤ 昨日、髪の毛をカットして、今日学校に行ったら、みんなに「その髪形、似合っているね」と言われた。		
⑥ 入院をしているとき、友だちがお見舞に来てくれた。		

- 📖 にほんご あやま おれい い つか 日本語では「すみません」が、謝るときにも、御礼を言うときにも使われます。
それは、自分のために、その人が時間や労力を使ってくれたことを謝って、感謝の気持ちを表す表現
です。また、御礼を言うときには顔の表情も大切です。

参考資料 6 アンケート調査用紙

「言語と文化をともに学ぶ日本語の授業」のアンケート

ヴァッサー大学の日本語クラスの皆さん、一週間お疲れ様でした。これは授業に関するアンケートです。みなさんが思ったことを自由に書いてください。英語で書いてもいいです。どうぞよろしくお願いいたします。

よしだ よしみ オウ アジョ チョン ジェヒ
吉田 好美 王 亜茹 鄭 在喜

- ◆ 「断り refusal」の授業について。

- ◆ 「依頼 request」の授業について。

- ◆ 「御礼 appreciation」の授業について。

- ◆ 今回のように文化と一緒に日本語を勉強する授業についてどう思いましたか。
自由に書いてください。

- ◆ その他、感想などがあれば、自由に書いてください。